展 望

父親の発達研究と家族システム

——生涯発達心理学的アプローチ——

佐々木 保 行

(鳴門教育大学)

PATERNAL DEVELOPMENT AND FAMILY SYSTEMS

——A Viewpoint of Life-span Perspective——

Yasuyuki SASAKI

(Naruto Univ. of Education)

The present article is intended to provide an overview on paternal involvements with children, and the impacts on fathers' own selves. Until now the majority of developmentalists in Japan often disregarded paternal influences on children. A large number of studies on parent-child relationships have been achieved especially on the nature of mother-child relationships. Still the researches on fatherhood and father-child interaction were very few. On the other hand it had become increasingly important to understand the families as social systems in European and American researchers, because family members: mothers, fathers and children, reciprocally exercise a direct and indirect influence. In recent years cultural images of fathers have been the nurturant or caring fathers, while fathers as well as children continue to develop.

Key words: paternal development, family system, fatherhood, nurturant father, caring father.

本論文は、父親の育児関与とそれが父親におよぼす影響についての概観を試みたものである。これまでわが国の発達研究者の多くは、父親の子どもへの影響についてほとんど考慮してこなかった。親子関係に関する大部分の研究は、主として母子関係の研究に集約されている。そのため父性や父子関係の研究は、大変少ないのが現状である。他方、欧米の研究者では、家族を社会システムとしてとらえる見方が次第に濃厚になっている。その理由は、母親、父親、子ども、の家族メンバーが、お互いに直接あるいは間接に影響しあう存在だからである。近年、父親の文化的イメージは、養育する父親として、また子どもと同様、発達する父親としてとらえられている。

近代家族の揺らぎと個人化

近代家族(modern family)の定義をめぐる家族社会学研究者の間でも、さまざまな見解がみられるが、「近代産業社会の成立に伴って形成された歴史的な1つの家族類型」(船橋, 1995a), という見方では共通理解が存在する。しかし、いまこの近代家族が崩壊しつつあり、やがて多様化した家族の下位類型となるだろう、と言われている(上野, 1994)。たとえばその一端をわが国の家族の世帯構成人数からみると、かつての主流であった5人以上の世帯の比率が激減し、それに比べて単独世帯や2人世帯の比率が高まり、今日ではおよそ単独世帯2割、2人世帯

2割、3人世帯2割、4人世帯2割、5人以上の世帯2割、というようにほぼ等分散の傾向を示している(船橋, 1995a, 1995b)。

このように世帯規模の縮小していることが、今日の家族形態の特徴の1つであるが、一方ではわが国の家族は戦後、核家族化したといわれている。家族は本当に核家族化したのであろうか。核家族という用語は、家族社会学や社会人類学の分野で使用される学術用語であるが、今日では恒常的に一般化されて使用されている。核家族とは、夫婦あるいはその一方と未婚の子どもからなる世帯を指す言葉であり、核家族化とは「核家族世帯が全普

通世帯の中で占める割合、すなわち核家族率が高くなること」(落合, 1994)を言うのである。

平成6年版「国民生活白書」(経済企画庁編, 1994)によると、核家族世帯と単独世帯の実数は、それぞれ年々、増加しているが、他方、三世帯同居世帯を中心とする「その他の親族世帯」数も微増している。戦後のわが国の家族史の最も大きな特徴は、「家から核家族へ」の変化といわれるが、核家族世帯の割合は、昭和30年(1955)の59.6%から高度経済成長期に相当する昭和35年(1960)の60.2%へ、そして高度経済成長終焉後の昭和50年(1975)には63.9%、というようにその増加率は、昭和30年とくらべていずれも僅かである。しかも昭和50年以後、核家族世帯の割合は減少している。因に昭和55年(1980)は63.3%、昭和60年(1985)は60.0%、平成2年(1990)は59.5%である。

一方、近年のわが国の家族変容を促した主な要因は何であろうか。第1は、産業構造の変化から第3次産業の比率の増大による経済のソフト化と、第2は、合計特殊出生率にみられるような少子化社会や長寿化社会の到来による人口動態的変動の人口革命であり、これらが家族、とりわけ女性の生き方の変革に拍車をかけたのである(柏木, 1993, 1995a; 落合, 1995; 上野, 1994)。その他、社会の都市化、情報化等の諸要因が、これまでの家族像の変容に影響を与えている。

しかもこうした近代家族の揺らぎの現状を、最も端的に反映している現象は、家族の個人化である。つまり家族集団の中に個や個人が埋没するのではなく、自己のアイデンティティや生き方の自己決定を求める志向性が、なかでも家事・育児専業主婦といわれる女性の側に、次第に顕著になってきている。したがって家族全体の枠組みから家族一人一人の個の時代への移行が、いま始まったといえる。

ところで1994年は国際家族年であったが、その宣言文(United Nations, 1991)で謳われている基本的理念は、「家族構成員間の平等であり、それぞれの人権の尊重」である。この基本的理念は家族の個人化、個としての自覚と行動、連帯としての個、の方向と軌を一にする。柏木(1994)は、日本心理学会第58回大会(1994年日本大学文理学部主催)で、わが国の22の心理学関係の学会からなる「心理学諸学会連合によるシンポジウム」の企画として、「変貌する家族の諸相——家族のゆくえを考える——」を開催した。今日の家族に起こっている諸相に、心理学がどう対応し、家族の意味を問い直す、という企画の主旨は、多くの心理学研究者がこれまで理念としてもちあわせてきた家族モデルと性別役割分業の暗黙の肯定観に、鋭く変革を迫るものであった。それは何よりも現実に起きている家族

の揺らぎと個人化の過程へ研究者の視点を向けさせ、心理学研究のあり方を問うことでもあった。

この数年にわたる柏木の著作・研究(たとえば1993, 1995b, 1995c)は、いずれも要約すれば「親にとっての子ども」の意義・価値の問題をめぐる論点に集約することができる。それはこれまでの発達研究、母子研究、親子・家族研究の大部分が、子どもにとっての親・母の意義・価値、つまり親や母親は子どもにどのような影響を与える存在か、という独立変数と従属変数の関係としてとらえられていたことである。しかも親といってもほとんどが母親を中心とした研究であり、家族システムの重要な一員である父親の視点は、欠落したままである。

「親にとっての子どもとは何か」、という問題に触れることのない研究は、所詮、人間としての親の顔も姿も見えてこない。いわばそこには「人間としての親は存在しない」ことになる、と同時に父親も男性も不在という親研究の不在を意味することにもなる(柏木, 1995a)。

ジェンダーの視点から問う母子・親子研究

——「される母性」から「する母性」へ——

フェミニズムやジェンダーの視点から、これまでの発達研究を問い直したわが国の代表的著作の「発達心理学とフェミニズム」(柏木・高橋編, 1995)は、性別役割分業型の近代家族のもつ矛盾と問題点を赤裸々に暴き出した画期的刊行物である。たとえば編者の一人である柏木(1995a)は、江原(1991)の指摘する、母性という言葉を使う主体の2つの立場である「される母性」と「する母性」という表現を引用し、これまでの母性や母子関係の問題を扱った研究には、「する母性」の側の視点が極めて欠落していたことの問題性を力説する。ここで言う「される母性」とは、生まれる側、世話される側に自身を置く母性論の立場であり、「する母性」とは、産む側、世話をする側に自身を置く母性論の立場である。

「する母性」の視点からのわが国で行われた研究の代表的なものは、柏木(1995)、柏木・若松(1994)、牧野(1982)、牧野・中西(1985)、大日向(1988, 1994)、佐々木(1980)、佐々木ら(1979, 1980, 1982)のものがある。「現代のエスプリ：女性の発達」(柏木編, 1995c)は、母親であることが人生全般の一時期になった今日、母親であるだけでなく、個として生きる方策を探りつつある母親にとって、子どもの意義・価値が変わりつつある現実を前に、「母親にとっての子どもの意味」を追求する必要性を強調している。また心理学研究者の依拠してきた家族モデルは、1960年代の核家族モデルにありはしないか、と社会学者に疑問を抱かせるほど、研究上の「ジェンダー・バイアス」が濃厚に存在する事実を、重く受けとめねばならない(船

橋, 1995a)。

一方、育児の困難さや生活の中の不平等について、自分の言葉で訴え、しゃべりはじめるようになった母親の出現は、これまでの日本社会の共通の原理とされた母子一体文化の枠組みを超えた、新しい母子の関係、さらには家族や人間関係の創出への模索兆候がみられるようになったことを意味する。したがっていままでの母子一体文化や近代家族の揺らぎが、今日、次第に顕著な傾向となりつつある。

さて、わが国における発達心理学や発達研究の中で、「する母性」や親にとっての子どもの意味がほとんど問われぬまま、主に子どもの発達に影響をおよぼす存在として行われた母性・母子研究は、その裏面史として父親不在・男性不在の研究を輩出させてきた。それらの背景には日本社会の歴史的、社会的、思想的、文化的諸要因と同時に、今日でも根強く蔓延る性別役割分業思想が、濃厚に存在していることを反映している。

たとえば1992年から1993年にかけて日本、韓国、フィリピン、アメリカ、イギリス、フランス、ドイツ、スウェーデン、の8か国の20歳以上の女性を対象として実施した「女性問題に関する国際比較調査」(東京都生活文化局, 1994)の中、「乳幼児の世話に関する家庭生活上の主な役割分担」の質問項目では、日本の「妻」は8か国中3位(68.6%)の高さである。一方、「家族全員」の分担は、スウェーデン(39.7%)、アメリカ(38.9%)、フランス(33.2%)、というように3割以上の割合を示しているが、日本の場合、下位から2番目の14.6%である。

「夫」の分担の割合は、各国とも10%未満であるが、わが国の場合、最下位の0.6%である。このように乳幼児の世話という家庭生活上の本質的側面の関与においても、わが国では女性の側の過重な行為として行われている。また1986年に行われた日本、アメリカ、西ドイツの「子供と父親に関する国際比較調査」(総務庁青少年対策本部編, 1987)によると、10歳から15歳の子供の相手を父親が積極的に行う理由の第1位は、アメリカでは「仕事よりも子供の養育のほうが大切」という養育の価値観を、西ドイツでは「子供のことを妻まかせにしていけない」という子育ての夫婦の協力に対する価値観を、日本では「子供にいろいろなことを教えたい」という伝承への価値観を、それぞれ示した。

因に仕事よりも養育という価値観に対し、西ドイツの父親は14.8%であったが、日本の父親は僅か3.0%にすぎなかった。この調査の子どもの年齢が10歳から15歳という思春期段階にあっても、なおアメリカや西ドイツの父親は、養育に関わることの重要性を意識している。これに対し、わが国の父親がこの時期の子どもの養育の位置

付けを自己のものとしてとらえていないことは、前述の「乳幼児の世話に関する調査」と同様、性別役割分業の実態を反映したものとして、厳しく受けとめる必要がある。

父親研究の変遷

これまで家族におけるシステムの一員である父親の研究は、欧米においても子どもの発達におよぼす父親の役割、というアプローチが主流であったが、今日では子育てに関与する父親研究が、次第に研究の中核を占めるようになった。しかしわが国では育児への協力という視点の研究や子どもの知的、社会的、道徳的、性的アイデンティティ等の形成や発達におよぼす、父親の役割研究に終始しているのが現状である。こうした研究の流れは、圧倒的な研究量を示す母子・母性の研究とくらべて、まだ微々たる存在であるが、父親や父子研究へ眼が向けられるようになったことは、大きな前進である。それにも拘らず父親を、子どもの発達に影響をおよぼす存在としてみる見方は、母子・母性研究の主要な立場であった「される母性」の研究視点とその軌を一にするものである。このことは父親にとっての子どもの意義や価値を目指す、現代の欧米でみられる父親研究とは、かなりの隔たりがある。

ところで母子研究や母親研究に焦点化されていた従来の発達心理学に、父親の研究が脚光をあびて登場するようになった最大の研究貢献者は、Lamb (1975, 1976, 1981, 1983, 1986, 1987)の一連の研究である。なかでも「父親：子どもの発達に忘れられていた貢献者」(Fathers : Forgotten contributors to child development, 1975)という論文は、発達研究者が子どもの発達におよぼす父親の影響に関して、無視していることへの批判を意味していた。しかしその後、彼はこの論文のテーマは適切ではない、と述べている(Lamb, 1986)。それは今日の父親が子どもの世話や養育に積極的に関与しているからである。

さらに「父親の再発見の時代」(era of paternal rediscovery) (Lamb, 1979)という表現は、父親の役割についての再検討とともににはじまったと言われるが、父親に関する研究プログラムの多くは、妊娠や子どもの誕生時の母親をサポートする存在としてとらえていた。しかし1980年代に入ると次第に、父親自身の発達の变化をとらえる研究が多くみられるようになった(Levant, 1988)。

他方、父親は発達心理学者や臨床心理学者によって、1970年代に改めて発見されたかもしれないが、父親の存在とその重要性はかなり早い時期に認識されている(Lamb, 1991)。たとえば父親の義務、責任、子どもへの影響のパターンは、すでに聖書をはじめ、宗教上の論文等

で記述されていたり、ローマ、ギリシャ、エジプトの各時代の哲学者の著作にもみられる。しかし近代の社会の中で、とくに1950年代と1960年代のアカデミックな心理学者は、子どもの養育される社会的脈絡や家族を無視し、父親も忘れてしまったのである (Bronfenbrenner, 1979)。

その後、アメリカでの父親研究が促進された社会的、歴史的、文化的背景には、出生率の低下、離婚率の上昇、単親家族の増加等の、家族の人口学的変動の要因 (Coltrane, 1995; Gottfried & Gottfried, 1994; Griswold, 1993; Hernandez, 1993)、女性の職場進出に伴う家族変動の分担や子どものウェルビーイング (well-being) をめぐるの政策的論議、とりわけ単親家族での養育問題に関した論議等から派生したのである。一方、発達心理学者や社会学者等の男性研究の分野が過去20年近くにわたって、その成果を積みあげてきたことも、父親研究に影響している (Brod & Kaufman, 1994; Kimmel, 1987; Radin, 1994)。

いまや北アメリカやヨーロッパでは、父親研究は社会的にも学問的にも、1990年代のホット・トピックとなっている (Marsiglio, 1995)。今日、父親研究の文化的中心は、道具的役割 (Parsons & Bales, 1956) としての父親家計維持者、稼ぎ手としての父親ではなく、新しい父親 (new father)、近代的父親 (modern father)、アンドロジニー的父親 (androgynous father) 等の名称が使用され、とくに1980年代以後、養育する父親 (nurturant father, caring father) の名称による新しい文化的イメージで扱われるようになった (Giveans & Robinson, 1985; Pleck, 1987)。しかも今日の父親は、以前の父親とくらべ、子どもの世話や養育に積極的に関与している (Lamb, 1986; Radin, 1994)。

父親への移行に伴う問題

家族に子どもが誕生することにより、父親の心理はどのような変化を示すのであろうか。出産後の母親に見られる涙もろさ、抑うつ気分、不安、軽い知的能力の低下等を主要症状とする、マタニティ・ブルー (maternity blues) といわれる抑うつ状態は、産褥期の精神病やうつ病などの重症の精神障害とくらべ、発生頻度も高く、これまで医学、心理学、保健衛生等の分野での重要な研究課題として取り扱われ、内外で多数の研究が発表されている (たとえば花沢, 1992; Kendell, Mackenzie, et al., 1984; Ketai & Brandwin, 1979; Pitt, 1973; 佐々木, 1988)。こうした研究の裏側に隠れて、子どもの誕生に伴う父親の抑うつ感情や父親としての適応過程に付随する心理的問題は、これまでほとんど無視されていたが、漸く近年になって研究の対象として浮上するようになった。

子どもの誕生後にブルー状態を示した父親群と統制群としての非ブルー状態の父親群を比較した研究によると、

前者の父親群は後者の父親群よりも、3か月児との交流の少なさが報告されている (Berman & Pedersen, 1987; Pedersen, 1980)。Robinson & Barret (1986) は、マタニティ・ブルーの抑うつ状態と類似した臨床症状である誕生後ブルー (postbirth blues) が、子どもの誕生後の父親の62%位に見られることを指摘した。すなわち妻の妊娠時から、子どもの誕生3か月後までの、父親の情緒的反応の変化を追跡したところ、妻の妊娠を知ったときには喜びで興奮するが、やがて落ち着き、そして誕生前には今度は不安感が強まる。しかし誕生とともに気分の高揚がみられるが、次第に落ち込んで抑うつ状態が誕生後3か月位までみられ、その後は普通の状態に戻ってゆく。

このように子どもの誕生に伴う父親の心理的揺らぎの問題は、Pruett (1987) が著した "*The Nurturing Father*" の中で、やや比喩的な意味を込めた表現で記述されている。それは、子どもの誕生から3か月位までの間に起こる、父親の役割をめぐる心理的動揺や不適合感、フラストレーション等の心身の症状を "paternity blues" という造語であらわした。この "パターニティ・ブルー" という言葉は、マタニティ・ブルーに対応する父親用の概念として使用されたが、とくに子どもの誕生後の数か月間に起こる、父親の内的体験に焦点をあてたものである。しかしこの面の研究は、これまでほとんど行われていないのが現状である (Seifer & Dickstein, 1993)。

"パターニティ・ブルー" は、家庭コンテクストの変動による心理的状況から派生する現象であるので、うつ病などの医学的疾患と区別すべき概念でもあるが、現代の父親像を明らかにする上で最も根源的な臨床的兆候ともいえる (小此木, 1994)。では何故、"パターニティ・ブルー" や "ポストバース・ブルー" といわれる、子ども誕生後の抑うつ感情が父親に発生するか、についての詳しいメカニズム研究は今後にまたねばならない。しかし考えられる要因としては、男性が子どもとより多く関与するための教育、サポート、それにソーシャル・サービスなどの機会に触れることがほとんどなく、父親準備教育への不足が、結果として父親のストレスを増加させている (Berman & Pedersen, 1987; McBride, 1989; Levant, 1988)。

父親教育の問題は今後、多角的に検討されねばならないが、父親への移行は、父親個人の内的世界と外的行動との再構成を意味するので、そこからこれまでの父親の行動パターンが変わるなどの、心理的不均衡状態が発生することになる (Cowan, 1988; Hawkins, Christiansen, Sargent & Hill, 1995)。

ところで人間の発達の可能性の中で、父親となり、養育を行う生活プロセスは、最も意義深い変容体験である。したがって家族システムの中に子どもが入ってくること

は、父親の自己確立化の発達にとって重要な刺激ポテンシャルとなる (Hawkins, Christiansen, Sargent & Hill, 1995)。しかし父親への移行や父親になることについての多くの研究は、子どもの幼児期に焦点化されて行われている。Heath (1976) および Heath & Heath (1991) は、父親になることが男性の心理発達に長期間の影響をおよぼすか否かを検討しているが、自己理解能力、他者への共感能力、感情統合能力などと発達の関連性を見出した。しかも有能な父親は、婚姻の満足度とも関連していた。

この婚姻関係の要因の中で、とくに家事労働が平等に分担されないと、妻は不公平感を抱き、妻のウェルビーイングや婚姻の質に関わる事柄に、否定的な影響を与えることになる (Hawkins, Christiansen, Sargent & Hill, 1995)。さらにこれまでの、父親になることと婚姻関係の問題に関する多数の研究では、とくに子どもの誕生によって婚姻の満足度が、父親の側に低下する傾向を示している (Belsky & Pensky, 1988)。また Cowan & Cowan (1992) の、妊娠から5歳になるまでの縦断研究によると、父親の妊娠に対する満足度は、妊娠から生後6か月まではゆるやかな減少を示すが、生後6か月と18か月との間に、満足度は急激に低下する。

一方、母親の満足度は、産褥期から生後2年位まで減少が続く。こうしたことから、生後18か月頃に夫婦の12.5%が別居や離婚し、生後5歳頃にはこの割合が20%に上昇する。しかしすべての夫婦に、婚姻関係の満足度の減少があらわれるのではなく、むしろ満足度が上昇する場合もある。Belsky, Rovine & Fish (1989) の研究では、30%の夫婦は婚姻の満足度の減少がみられるが、30%は婚姻関係が改善の方向へ行き、残りの40%はほとんど変動はみられなかった。

では子どもの誕生により何故、父親の側に、とりわけ婚姻関係の満足度が減少するのであろうか。それには様々な理由がみられるが、第1は養育に関わる身体的な緊張、第2は経済的な責任の増大、第3は新しい家族の責任に対する情緒的な要請、第4は親になることによる種々の制限、第5は親の役割アレンジの再定義、などによる (Cowan & Cowan, 1992; Belsky & Isabella, 1985; Snarey, 1993)。さらに父親になると、妻の“パートナー”としての側面が減少し、親としての自己規定の割合が上昇することも、その要因である (Cowan & Cowan, 1992)。

いずれにしても父親になることは、すでに述べたように男性の心理発達に長期間にわたる影響をもつ (Heath, 1976) ことが明らかにされているので、つぎに父親の育児への関与の問題を中心に、親の発達について検討する。

親にとっての子どもとは何か、という研究視点が、とりわけわが国の親子・家族関係の研究分野で欠落していることは、柏木 (1993, 1994, 1995a) がたびたび警告を鳴らしている。それは発達心理学の中で親子の問題を研究する際、家族システムの観点が抜け落ちているからである。このことは子どもの誕生により、親役割をどのように行うかによって、親自身と家族全体がどう変化し、発達するか、という家族システムとしての研究視点が欠けていることを意味する。

柏木・若松 (1994) は、家族システムとしての親の発達研究を人格発達の問題として位置付けることにより、3～5歳児をもつ356対の両親を対象に、「親になる」ことによる成長・発達に関する、50項目の質問紙調査によって研究を行った。その結果、「角がとれて丸くなった」「考え方が柔軟になった」などの「柔軟さ」の因子、「他人の迷惑にならないように心がけるようになった」「自分のほしいものなどが我慢できるようになった」などの「自己抑制」の因子、「日本や世界の将来について関心が増した」「環境問題 (大気汚染・食品公害など) に関心が増した」などの「視野の広がり」の因子、「物事を運命だと受け入れるようになった」「運や巡りあわせを考えるようになった」などの「運命・信仰・伝統の受容」の因子、「生きている張りが増した」「長生きしなければと思うようになった」などの「生き甲斐・存在感」の因子、「多少他の人と摩擦があっても自分の主張は通すようになった」「自分の立場や考えはちゃんと主張しなければと思うようになった」などの「自己の強さ」の因子、をそれぞれ抽出した。

この研究は、親になることがどのような内容とその側面をもつかを、より踏み込んで人格の諸相としてとらえたものである。それだけに親の発達の意味する中味が、より鮮明になったといえる。次いで父親と母親の因子別得点の平均をみると、いずれも父親より母親の方が、有意に高い得点を示した。このことは親になることによる自己の変化と発達が、父親よりも母親に顕著であることを端的にあらわしている。この両者の違いは、「子育ての関与の差」の要因によると考えられる (柏木・若松, 1994)。

では父親の育児関与の基盤には、どのような諸要因が関わっているであろうか。大きく分けると、個人的・心理的要因と家族的背景の要因とに分類できる (Parke, 1995)。第1の個人的・心理的要因には、父親の性役割への態度、育児関与への動機づけやスキルなどが関係する (Lamb, 1987)。一般的傾向として、性役割への態度と父親行動との間には、相関がみられるが、一方で明確な関連がみられないとする指摘も存在する (De Frain, 1979; Lamb, Frodi, Hwang & Frodi, 1982)。

しかし多くの研究では、アンドロジニーの性役割観や

態度を示す男性や母性本能を否定する男性は、3歳から6歳児への愛着行動に積極的に関わっている (Russell, 1983)。また父親は有能な養育者であるにも拘らず、実際の養育行動のスキルのレベルでは、かなりの個人差がみられる (Parke & Sawin, 1980)。

父親の育児関与に関する研究は、わが国ではあまりみられない (Ishii-Kuntz, 1993, 1995) が、その中でも前述した柏木・若松 (1994) の研究は、父親と母親で育児や子どもについての感じ方や考え方が、どう異なっているかを調べている。それによると抽出された3つの因子(「子どもは心の支えだ」「子どもを見てみると元気づけられる」などの「育児への肯定感」因子、「子どもから解放されたいと思う」「子どもを育てることは負担だ」などの「育児による制約感」因子、「子どもは自分の分身だと思う」「子どもは自分がこの世に存在した証だと思う」「子どもは分身感」因子)のうち、父親と母親の間で因子得点の差がみられるのは、「育児による制約感」と「子どもは分身感」の2つの因子であった。

「育児による制約感」では母親の方が父親よりも、「子どもは分身感」では父親の方が母親よりも、それぞれ有意に高い得点を示した。「育児による制約感」は、通常、育児不安といわれてきたものにほぼ相当し、ここでも母親に極めて強いことが再確認された。しかし「子どもは分身感」というとらえ方は、多くの場合、今日の母親の特性をあらわすといわれているが、実際には父親の方が高い結果を示した。そこで父親の家事や育児関与の高低によって考察すると、育児関与の高い父親の方が、関与の低い父親よりも有意に高い得点を示したのである。しかも育児関与の積極的な父親は、母親と同程度の得点傾向であった。つまり育児関与の低い父親は、日頃、子どもとの交流・接触の経験が少ないことから、子どもを「分身」とみる、素朴で、理念的なとらえ方をすることになる。一方、母親は育児に関わる様々な過程を体験しているだけに、子どもを単純に「分身」とみる考え方に、安易に賛成しかねる、というのが真相である。

さらに性役割観・態度と育児関与との関連で調査すると、やはり家事・育児への関与の度合いの高い父親の方が、関与の低い父親よりも、性別役割分業に批判的な「革新的・非伝統的な性役割」観を、また「男性の育児・家事参加」や「女性の社会進出」に対し肯定的な見解をそれぞれ示した。

以上、父親の育児関与の基盤に関わる諸要因を、主に個人的・心理的観点から検討してきたが、近年、養護性 (nurturance) という視点からアプローチする必要性が浮上してきた (Fogel & Melson, 1986; 花沢・松浦, 1986; 小嶋, 1989, 1991; Pruett, 1987)。養護性とは「相手の健全な発達を促進するために用いられる共感性と技能」(フォーゲル・メ

ルソン, 1989)として、幅広くとらえることができる。幼い子どもだけでなく、「生きとし生けるものに対する慈しみと育みの心と行為」(小嶋, 1991)である。この養護性は子どもの世話や子どもとの遊びとの間に相関がみられる (花沢・松浦, 1986) ことから、とりわけ子どもとの接触・交流の要因が重要である。

つぎに父親の育児関与を規定する第2の大きな要因である、家族的背景について触れてみる。まず、母親の態度が父親の育児関与のレベルと相関があるように、アンドロジニー的な母親では父親の育児関与が高く、また母親が育児の有能なパートナーと父親をとらえていると、父親の育児関与をより促進する傾向がみられる (Cowan & Cowan, 1992)。2つ目は婚姻関係と父子関係の問題についてである。父子関係の相互パターンは、婚姻関係の質によって影響され、しかもこれは母子関係よりも大きく影響される。父親を情緒的、情報・認知的にサポートすることが、母親の場合よりも育児関与の有能さの程度と関わっている (Belsky, Gilstrap & Rovine, 1984)。このようなことから父親の成功的な育児関与は、母親よりも支持的な婚姻関係に、より依存していることになる。

さらに育児関与の度合いの高い父親は、子どもの発達に影響を与えるが、とくに伝統的家庭の子どもとくらべ、育児関与の高い父親の子どもの方が、自己統制能力、言語能力においてすぐれている。一方、育児関与の高い父親は伝統的家庭の父親よりも、子どもにより高い教育程度や職業への期待を抱いている (Radin, 1982, 1988)。これらの他にも父親の育児関与が、父親自身の人格発達を促し、そのことが母親や子どもの心理的安定を生み出すことも知られている (Gottfried & Gottfried, 1988, 1994)。

牧野 (1994) は、幼稚園、小学校、中学校までの広範囲にわたる年齢の子どもを父母を対象に調査し、育児関与の高い父親の方が育児関与の低い父親とくらべ、「親としての自覚」因子(「親としていい加減なことではできないと思うようになった」など)と「人間としての成熟」因子(「性格が丸くなった」など)とで、有意に高い得点を示す研究を報告した。この調査では子どもの年齢の範囲が大きすぎるが、柏木・若松 (1994) の研究と同様の傾向が指摘されたことになる。

さらに父親の子育て関与による満足度は、父親のコミュニティへの参加状況と関連しており、しかも積極的にコミュニティの組織と関わることで、父親の社会的アイデンティティを適応の方向へ導くことになる (Heath & Heath, 1991)。その他、子どもの誕生に出会った父親や子育てを通しての自己の人格的変容と発達を扱った父親の体験記等の刊行物も、父親の率直な内的体験を知る上で有力な資料として活用できる (グリーン, 1987; 広岡, 1990)。

本項でのまとめにあたり、柏木(1995a)の言葉を引用してみる。「親を親自身の人格発達の問題として扱う研究は、内外を問わずまだ緒についたばかりである。しかし、これは親を子どもにとっての親ではなく、親にとっての子どもの意味を問う、いわば親をはじめ人間として扱うこと、また成人期の発達、とりわけパーソナリティの形成・発達を家族の中での経験との関連でみることである。換言すれば、親を生涯発達のみる視点、および、個人の発達と家族の発達とを相互関連的に捉える視点(大江のいう“家族を活性化化する子ども”)であり、今後さらに検討していくことが重要だと思う」(引用者注：柏木は大江健三郎の「家庭を活性化する子供」[講座現代・女の一生4, pp. 113-133]を文献としてあげている)。このことは親の人格的発達の研究を進めるにあたり、システムとしての家族研究の重要性に関わる問題提起であり、今後の方向性を示唆したものとして、重く受けとめる必要がある。

父親になることをめぐる現代の課題

——父親にとって子どもとは何か——

現代日本の家庭教育の特色や課題を明らかにするために行われた「家庭教育に関する国際比較調査報告書」(日本女子社会教育会, 1995)によると、日本、韓国、タイ、アメリカ、イギリス、スウェーデン、の6か国の中で「子どもを持って自分自身も成長している」と「いつも感じる」父親は、日本が45.4%(母親60.2%)で最低である。最も高いスウェーデンの父親は77.5%(母親87.0%)、アメリカの父親は83.1%(母親81.6%)、イギリスの父親は68.3%(母親67.6%)とくらべ、格段に低い。

この調査は0歳から12歳までの子どもの親が対象であるが、日本の父親が、父親としての成長・発達を「いつも感じる」割合が低いのは、何に由来するのであろうか。既に父親の育児関与の基盤に関わる規定要因の研究でとりあげたが、育児関与行動の欠落ないしは不十分な関わりが、父親の人格発達に影響するまでに至っていないことを物語っている。一方、大日向(1994)は、昨今の母親が育児の過程で、子どもや自己への苛立ちを強めている傾向があることを報告している。

それによると乳幼児をもつ約2,800人の母親のうち、9割強が「育児をつらく思うことがある」、8割弱が「子どもをかわいく思えないことがある」と回答した。さらに、とりわけ「育児をつらく思い」「子どもをかわいく思えない」、と訴える母親149名を対象に、聞き取り調査を行った結果、苛立ちの実態は、次のような要因によるところが明らかになった。1)母親になる前に抱いていた予想や期待が外れた戸惑いから、子どもへの愛着や母親役割の受容に困難を覚えるケース。2)子どもの行動や個性が期待

に反していたり、手に負えないことが続き、子どもへの苛立ちを強めるケース。3)子どもが「思い通りにならない」「手が掛かる」という気持が高じて、自分の生活や時間がもてない、という苛立ちを強めるケース。4)夫が育児に非協力で、自分の生活や楽しみばかりを優先することからくる苛立ちのケース。5)同居の舅・姑などとの人間関係の葛藤から精神的に不安定になり、苛立ちを強めるケース。6)育児が評価されないことにむなしさを覚え、日常的な苛立ちとなっているケース。7)子どもをかわいいと思えず、うっとうしく感じるケース。

これらの典型的な育児への苛立ちのケースは、今日の母親の一部かもしれない。かつての育児ノイローゼや育児に疲れ、はては母子心中・子殺しへの破滅的な道をたどった母親と今日の子どもや育児へ悩み、苛立ち、子どもを虐待する母親とでは、両者の間に共通性もみられるが、一方では相違点が浮き上がってきている。この研究によって母親の苛立ちの実態の内実が明らかにされたことは、わが国の性別役割分業の根強さが改めて確認されたことでもある。当然のことながら母親自身の人格的未熟さもそれらの背景に存在するが、父親の育児関与行動の低さから派生する家族システムの矛盾として、母親の苛立ちを把握する必要性がある。これらは親であることをめぐる現代の社会的課題でもある(大日向, 1992)。

同様に子どもの虐待に関する問題が、次第に社会の関心事となり、関連分野の研究や対策等が具体的に行われるようになってきたが、虐待者に占める母親の比率の高さは、現代の母親の子育て危機として受けとることが大切である。ところでこの虐待の発生原因は、これまで特定のリスク因子が指摘されていたが、Kaufman & Zigler(1989)は、リスク因子が直接、虐待へ直結するものでないことを明らかにした。それは被虐待の体験、低い自尊心、夫婦不和、貧困、失業等のリスク因子が存在していても、上手な対人スキル、支持的な配偶者、治療的介入、十分な社会的サポート等の補償因子があると、虐待は発生しない。つまり補償因子の存在が虐待発生の可能性を低減化させるのである。

したがって両方の因子を考察することによって、虐待の発生が理解されることになる。しかも子ども時代に虐待された親が、自分の子どもを虐待する世代間伝達は30%±5%であって、虐待された親が子どもを虐待することとの間には、直接的な関連はないのである。

父親研究の今後の課題

家族システムの視点から父親をとらえる研究はまだ少なく、多くが二者あるいは三者関係の中で研究されている(Parke, 1988, 1995)。したがって今後は、家族を分析の

単位として検討する必要がある。第2は父子研究をより充実させ、発展させるためには、乳幼児期の子どもと同様、児童期、青年期の年齢段階の子どもと父親の関係に焦点をあて、しかも家族システムあるいは生涯発達の見点から研究することが要請されてくる。それは子どもと同様、父親も生涯にわたって発達するからである(柏木, 1993, 1995b; Parke, 1988, 1990, 1995)。

第3は、既にふれたように父親の行為・活動は、父親自身の自己意識や社会的アイデンティティを変えることにもなるので、父親自身の内省報告、育児記録、子どもとの交流日誌などの報告書の類の活用を、積極的に行うことも有効な方法となる。第4は、父親の養育行動や生活者としての行動と社会的なコミュニティ行動との関連性を、考察の対象として位置付けることも必要である。それは社会システムの中での父親研究への道を開くことにもなる。第5は、研究の手法が主に質問紙法による場合が多いことから、今後は他の方法論の開拓の努力が進められることにより、父親研究の拡がりが一層、期待される。第6は、今後、家族の個人化の過程がさらに顕著になることが予測されるので、多様な家族形態での父親研究の具体化が期待される。

引用文献

- Belsky, J., Gilstrap, B., & Rovine, M. 1984 The Pennsylvania infant & family development project, I: Stability & change in mother-infant and father-infant interaction in a family setting at one, three & nine months. *Child Development*, 55, 692-705.
- Belsky, J., & Isabella, R. 1985 Marital and parent-child relationships in family of origin and marital change following the birth of a baby: A retrospective analysis. *Child Development*, 56, 342-349.
- Belsky, J., & Pensky, E. 1988 Marital change across the transition to parenthood. In R. Palkowitz & M.B. Sussman (Eds.), *Transition to parenthood*, pp.133-156. NY: Haworth.
- Belsky, J., Rovine, M., & Fish, M. 1989 The developing family system. In M. Gunnar & E. Thelen (Eds.), *Systems and development*, Vol.22, pp. 119-166. NJ: Lawrence Erlbaum Associates.
- Berman, P.W., & Pedersen, F.A. 1987 Research on men's transitions to parenthood: An integrative discussion. In P.W. Berman & F.A. Pedersen (Eds.), *Men's transitions to parenthood: Longitudinal studies of early family experience*, pp.217-242. NJ: Lawrence Erlbaum Associates.
- Brod, H., & Kaufman, M. 1994 Introduction. In H. Brod & M. Kaufman (Eds.), *Theorizing masculinities*, pp.1-10. CA: Sage.
- Bronfenbrenner, U. 1979 *The ecology of human development*. MA: Harvard University Press.
- Cicchetti, D., & Rizley, R. 1981 Developmental perspectives on the etiology, intergenerational transmission, and sequelae of child maltreatment, *New directions for child treatment*, 11, 31-55.
- Coltrane, S. 1995 The future of fatherhood: Social, demographic, and economic influences on men's family involvement. In W. Marsiglio (Ed.), *Fatherhood*, pp.255-274. CA: Sage.
- Cowan, P.A. 1988 Becoming a father: A time of change, an opportunity for development. In P. Bronstein & C.P. Cowan (Eds.), *Fatherhood today: Men's changing role in the family*, pp.13-35. NY: Wiley.
- Cowan, C.P., & Cowan, P. 1992 *When partners become parents*. NY: Basic Books.
- De Frain, J. 1979 Androgynous parents tell who they are and what they need. *The family coordinator*, 28, 237-243.
- 江原由美子 1991 リブの主張と母性観 グループ「母性」解説講座編「母性」を解説する 有斐閣 194-208.
- Fogel, A., & Melson, G.F. (Eds.) 1986 *Origins of nurturance: Developmental, biological and cultural perspectives on caregiving*. NJ: Lawrence Erlbaum Associates.
- フォーゲル, A.・メルソン, G.F. 1989 子どもの養護性の発達 小嶋秀夫編 乳幼児の社会的世界 有斐閣 170-186.
- 船橋恵子 1995a 家族の変容 柏木恵子・高橋恵子編 発達心理学とフェミニズム ミネルヴァ書房 53-76.
- 船橋恵子 1995b 家族問題のこれからと子ども 児童心理 8月号臨時増刊 89-96.
- Giveans, D.L., & Robinson, M.K. 1985 Fathers and the pre-school age child. In S. Hanson & F. Bozett (Eds.), *Dimension of fatherhood*, pp.115-140. CA: Sage.
- Gottfried, A.E., & Gottfried, A.W. (Eds.) 1988 *Maternal employment and children's development: Longitudinal research*. NY: Plenum.
- Gottfried, A.E., & Gottfried, A.W. (Eds.) 1994 *Redifing families: Implications for children's development*. NY: Plenum.

- グリーン, B. (西野薫・訳) 1987 ポブ・グリーン之父
親日記 中央公論社
- Griswold, R.L. 1993 *Fatherhood in America : A history*. NY : Basic Books.
- Hawkins, A.J., Christiansen, S.L., Sargent, K.P., & Hill, E.J. 1995 Rethinking father's involvement in child care : A developmental perspectives. In W. Marsiglio (Ed.), *Fatherhood*, pp.41-56. CA : Sage.
- 花沢成一 1992 母性心理学 医学書院
- 花沢成一・松浦純 1986 男女青年における対児感情と乳幼児接触経験との関係 日本教育心理学会第28回総会発表論文集, 356-357.
- Heath, D.H. 1976 Competent fathers : Their personalities and marriages. *Human Development*, 19, 26-39.
- Heath, D.H., & Heath, H.E. 1991 *Fulfilling lives : Paths to maturity and success*. San Francisco : Josey-Bass.
- Hernandez, D.J. 1993 *America's children*. CA : Sage.
- 広岡守穂 1990 男だって子育て 岩波書店
- Ishii-Kuntz, M. 1993 Japanese fathers : Work demands and family roles. In J.C. Hood (Ed.), *Men, work, and family*, pp.45-67. CA : Sage.
- Ishii-Kuntz, M. 1995 Paternal involvement and perception toward father's roles : A comparison between Japanese and the United States. In W. Marsiglio (Ed.), *Fatherhood*, pp.102-118. CA : Sage.
- 柏木恵子 1993 父親の発達心理学 川島書店
- 柏木恵子 1994 変貌する家族の諸相 日本心理学会第58回大会発表論文集, S6.
- 柏木恵子 1995a 親子関係の研究 柏木恵子・高橋恵子編 発達心理学とフェミニズム ミネルヴァ書房 18-52.
- 柏木恵子 1995b 親の発達心理学 岩波書店
- 柏木恵子編 1995c 女性の発達 現代のエスプリ 2月号
- 柏木恵子・高橋恵子編 1995 発達心理学とフェミニズム ミネルヴァ書房
- 柏木恵子・若松素子 1994 「親となる」ことによる人格発達 : 生涯発達の視点から親を研究する試み 発達心理学研究, 5(1), 72-83.
- Kaufman, J., & Zigler, E. 1989 The intergenerational transmission of child abuse. In D. Cicchetti & V. Carlson (Eds.), *Child maltreatment*, pp. 129-150. NY : Cambridge University Press.
- 経済企画庁編 1994 平成6年版・国民生活白書 大蔵省印刷局
- Kendell, R.E., Mackenzie, W.E., West, C., Mc Guire, R. J., & Cox, L. 1984 Day-to-day mood changes after childbirth. *British Journal of Psychiatry*, 145, 620-625.
- Ketai, R.M., & Brandwin, M.A. 1979 Childbirth-related psychosis and familial symbiotic conflict. *American Journal of Psychiatry*, 136, 190-193.
- Kimmel, M.S. 1987 Rethinking "masculinity" : New directions in research. In M.S. Kimmel (Ed.), *Changing men : New directions in research on men and masculinity*, pp.9-24. CA : Sage.
- 小嶋秀夫 1989 養護性の発達とその意味 小嶋秀夫編 乳幼児の社会的世界 有斐閣 187-204.
- 小嶋秀夫 1991 親となる過程の理解 大日向・古澤・小嶋・佐々木・都留 著 母性の心理・社会学 医学書院 95-143.
- Lamb, M.E. 1975 Fathers : Forgotten contributors to child development. *Human Development*, 18, 245-266.
- Lamb, M.E. (Ed.) 1976 *The role of father in child development*. NY : Wiley.
- Lamb, M.E. 1979 Paternal influences and the father's role : A personal perspectives. *American Psychologist*, 34, 938-943.
- Lamb, M.E. 1981 *The role of father in child development*. Rev. ed. NY : Wiley.
- Lamb, M.E. 1986 The changing roles of fathers. In M.E. Lamb (Ed.), *The father's role : Applied perspectives*, pp.3-27. NY : Wiley.
- Lamb, M.E. (Ed.) 1987 *The father's role : Cross-cultural perspectives*. CA : Lawrence Erlbaum Associates.
- Lamb, M.E., Frodi, A.M., Hwang, C.P., & Frodi, M. 1982 Varying degrees of paternal involvement in infant care. In M.E. Lamb (Ed.), *Nontraditional families*, pp.117-138. NJ : Lawrence Erlbaum Associates.
- Lamb, M.E., & Sagi, A. (Eds.) 1983 *Fatherhood and family policy*. CA : Lawrence Erlbaum Associates.
- Levant, R.F. 1988 Education for fatherhood. In P. Bronstein & C.P. Cowan (Eds.), *Fatherhood today : Men's changing role in the family*, pp.253-275. NY

- : Wiley.
- 牧野カツコ 1982 乳幼児をもつ母親の生活とく育児と不安 家庭教育研究所紀要, 3, 34-56.
- 牧野カツコ・中西雪夫 1985 乳幼児を持つ母親の育児不安——父親の生活および意識との関連—— 家庭教育研究所紀要, 6, 11-24.
- 牧野暢男 1993 父親にとっての子育て体験の意味 発達, 56, 28-34.
- McBride, B.A. 1989 Stress and father's parental competence: Implications for family life and parent educators. *Family Relations*, 38, 385-389.
- Marsiglio, W. 1995 Fatherhood scholarship: An overview and agenda for the future. In W. Marsiglio (Ed.), *Fatherhood*, pp.1-20. CA: Sage.
- 落合恵美子 1994 21世紀家族へ 有斐閣
- 落合恵美子 1995 「個人を単位とする社会」と「親子関係の双系化」 ジュリスト, No.1059, 37-44.
- 大日向雅美 1988 母性の研究 川島書店
- 大日向雅美 1991 母性をめぐる現状と課題 大日向・古澤・小嶋・佐々木・都留 著 母性の心理・社会学 医学書院 1-30.
- 大日向雅美 1992 親としての発達 藤永保編 現代の発達心理学 有斐閣 264-277.
- 大日向雅美 1994 子どもを愛せない母親に関する研究 東京女性財団助成研究報告書
- 小此木啓吾 1994 パタニティ・ブルーの心理 周産期医学, 24(2), 189-193.
- Parke, R.D. 1988 Families in life-span perspective: A multilevel development approach. In E.M. Hetherington, R.M. Lerner & M. Perlmutter (Eds.), *Child development in life-span perspective*, pp. 159-190. NJ: Lawrence Erlbaum Associates.
- Parke, R.D. 1990 In search of fathers: A narrative of an empirical journey. In I.E. Sigel & G.H. Brody (Eds.), *Methods of family research*, Vol.1, pp. 153-188. NJ: Lawrence Erlbaum Associates.
- Parke, R.D. 1995 Fathers and families. In M.H. Bornstein (Ed.), *Handbook of parenting*, Vol.3, pp. 27-63. NJ: Lawrence Erlbaum Associates.
- Parke, R.D., & Sawin, D.B. 1980 The family in early infancy: Social interactional and attitudinal analyses. In F.A. Pedersen (Ed.), *The father-infant relationship: Observational studies in the family setting*, pp.44-70. NY: Praeger.
- Parsons, T., & Bales, R.F. 1956 *Family, socialization and interaction process*, Illinois: Free Press.
- Pedersen, F.A. 1980 Overview: Answers and reformulated questions. In F.A. Pedersen (Ed.), *The father-infant relationship*, pp.147-163. NY: Praeger.
- Pitt, B. 1973 Maternity blues. *British Journal of Psychiatry*, 122, 431-433.
- Pleck, J. 1987 American fathering in historical perspective. In M.S. Kimmel (Ed.), *Changing men*, pp.83-97. CA: Sage.
- Pruett, K.D. 1987 *The Nurturing Father*. NY: A Warner Communication Company.
- Radin, N. 1994 Primary-caregiving father in intact families. In A.E. Gottfried & A.W. Gottfried (Eds.), *Redefining families*, pp.11-54. NY: Plenum.
- Robinson, B.E. & Barret, R.L. 1986 *The Developing father: Emerging roles in contemporary society*. NY: The Guilford Press.
- Russell, G. 1983 *The changing role of fathers*. Australia: Queensland University Press.
- 佐々木保行編 1980 日本の子殺しの研究 高文堂出版
- 佐々木保行 1988 母子関係の病理 心理学評論 31, 146-157.
- 佐々木保行・佐々木宏子 1979 乳幼児をもつ専業主婦の育児疲労(第1報)——生活心理学的アプローチ—— 宇都宮大学教育学部紀要 第1部 29号, 21-43.
- 佐々木保行・佐々木宏子 1980 乳幼児をもつ専業主婦の育児疲労(第2報)——生活心理学的アプローチ—— 宇都宮大学教育学部紀要 第1部 30号, 11-25.
- 佐々木保行・高野陽・大日向雅美・他 1982 育児ノイローゼ 有斐閣
- Seifer, R., & Dickstein, S. 1993 Parental mental illness and infant development. In C.H. Zeanak, Jr. (Ed.), *Handbook of infant mental health*, pp. 120-142. NY: The Guilford Press.
- Snarey, J. 1993 *How fathers care for the next generation*. MA: Harvard University Press.
- 総務庁青少年対策本部編 1987 子供と父親に関する国際比較調査報告書 大蔵省印刷局
- 東京都生活文化局 1994 女性問題に関する国際比較調査
- 上野千鶴子 1994 近代家族の成立と終焉 岩波書店
- United Nations 1991 *Proclamation of IYF*. Vienna.
- 財団法人・日本女子社会教育会 1995 家庭教育に関する国際比較調査報告書